



～シーズン1「SMクラブの受付」～

エピソード 7 : サボる受付が仕事化する

しすてむ♥□きよたけ

僕は、止まらない。進む。自分だけ止まっている気になることはあっても、他の人が進み、社会が進むのだから、止まってなんていられない。

僕は、飽きる。何か一つを貫くことも大事だと思うけど、つまらなくなる。自分に違う息吹が舞い込むことを望んでいる。

僕は、自由に動きたい。いる場所で、勝手に振る舞いと思われることをしているのだろうが、結果として、思いがけない息吹を吹かせていること起きるのではないかと思っている（←これができます！はないけど、何もできないはずはないと堂々と試している感じ）。

なぜ、止まらないこと、飽きること、自由に動きたいことを書いたのか。今回で「SMクラブの受付」を一旦止め、次号からシーズン2を書き始めようと思ったからです！前号の最後に「初日に行った実務的なことを綴る」と書いたんだけど、変えまーす！

思い出して行くと、僕の勤務時間の多くは、寝ることやおしゃべりをする事だったので、その辺りを中心に書きます。仕事と思えないワードですが、僕はそこがキャストの欲求や不満をキャッチし仕事にしていたようでした。

さて、それではいつも通り、今回のラインアップを。「1. ちびっこ相撲からデータ収集」、「2. お昼寝からオススメポイントGET」、「3. 人懐っこさから限定コース」、「4. 売り上げを届けた飲み」、「5. アベルの悩み」、「6. 僕はサボっていたけど許されていた」

1. ちびっこ相撲からデータ収集

僕の身長は、157センチ。とても小さなおっさんだ（当時はギリおっさんではなかった・・・ということにしておこう）。

プレイに、格闘プレイがある。格闘を性風俗で解釈することは難しい。SM嗜好を

通常の射精を目指す快感産業と捉えるからだろう。性風俗から、格闘プレイを観戦したら、エッチな放送をしていることにもなるので、どうやら当たり前とされている性的対象の水準から格闘は外れている。「プレイ」とついている理由がよくわかる。

格闘プレイが好きで、僕より少しだけ身長が低いキャストがいた。はじめから、格闘プレイが好きだと知っていたわけではなかった。

僕が、待機室で写真の入れ替え作業などをしていた時、「清びー、清びー」と藍子が後ろから抱きつかたことがあった。

「ちょ！近すぎるで！おっばい当たる！アウト！」など言いながら、席を立つと彼女は「おっと！闘うのか！来るのか！来い！！ワシは強いぞ〜！」といいながら、僕は「お！そんなん負けへんで〜どうだどうだ！！！」と言いながら、足をかけたりつかみ合ったり、時には倒してしまうようなことをしていた。

それを観ていた周りのキャストが「おっと！ちびっこたちが、何か始めてる〜」「ちびっこ相撲じゃな〜い？」とやんや言っていた。

ここから僕は、さらに藍子に興味が出た。この人、おしゃべりより、身体を使った方が会話につながる、と思った。ここから、売り上げが悪いときにこれまでの記録を見直し、通常コースとイベントコース、時期、客層などを辿り始めた。

彼女がしたいと思うタイミングと客の欲求がマッチしていない時期も見えてきた。

また、写真の写り方と彼女がしたいことが合っていないような気もしたので、少々厚かましいか？と思いながら、一緒に写真の見直しを試みた。

結果的に売り上げが上がったがどうかはわからないし、直接的にグンと効果があったかもわからない。だけど、彼女に惹き寄せられる僕が居たのだから、きっとそのタイミングは、受付がキャストと作ることができるのだと思った。

ここでの「プレイ」は格闘でも快樂でもない。僕も楽しんでいるから「遊び」だと思う。しかし、時間が過ぎて気づいたことは、僕が受付の「実務」にしていくチャンスだったと思う。

2. お昼寝からオススメポイント GET

待機時間が少しでもあれば、キャストたちは、プレイログをTwitterであげたり、ブログの更新をしたりしていた。でも、だいたいおしゃべりやゲームをしたり、アニメを観たりしていた。中には、お昼寝を。

こんな光景を横目にしながら、僕はどんなお客さんが来ているのかなど入会証の嗜好のチェック項目などを見ながら、どんなことをしているのか想像し、何をしたら電話がもっと鳴るのか・・・と考えていた。

無駄ではないが、ま〜僕も黙ってじっとしているのも面白くないから、面白く過ごす方法を考えていたのだろう。

そんなことをしていると、キャストから、プレイのことを聞くことがあった。初回からどんどんできることが増えているマゾさ

ん。コンスタントに同じプレイのマゾさん。好きなキャストが決まっていて、その人が出すイベントならなんでも来てしまうマゾさんなど、あらゆる人がいることを知った。

それを誘発させているキャストたちに興味湧いていた（←辞めてから気づいた）。

なぜだか、実務をしている時間は、僕は少なかったと思う。だって、時間があると仮眠をとる桃香がゴロゴロし始めたら、僕もゴロゴロ。よく、二人でブランケットをかけ、「足当たらない？」とか言いながら横になっていたものだ。ときには、オナラをしてしまうハプニングが起きることだってあった。それなりに羞恥もあったと思うが、なんとなく了解しあってしまえる、やり過ぎも互にあった。

ある日、「清Pー、温玉食べたくない？」
「え？まーそう言われたらそうやなー」。

作り方は忘れたが、貯蓄貯金ぎよのブランケットを掛け、ホットカーペットをつけ、卵を必死に温めた記憶がある。

「醤油ない」「あ、俺買ってくる？」「電話とっとくよー」「ほんじゃ、鳴ったら5分後にかけてって言って！」「はーい」。

勤務中に温玉が本当にできるのかどうか、さらに、食べるなら美味しく食べたいから電話番号を放棄！

でも、こんなことで知ることが合った。彼女は、遠慮しがちだったり、気を使うことが多い人と思っていたのだが、上手に甘え頼ることができる人でもあった。

だからなのか、電話ごしでなよっとして、代わりに勝手な要望をしてくる客だなーと

思っている人が、彼女に懐いていた。たとえば彼女が「うっとうしい」と言っても、プレイの場ではそれが、「あしらい」として、「女王様の振る舞い」へ変わっていたのではないだろうか。

僕は、同じように待機室で過ごしてみてもよかった。彼女の少しリラックスしている時間を共にしなかったら、彼女を知ることにはなかったかもしれないし。

その時間により、彼女の風貌以外の気遣いや優しさある振る舞いを知り、客におすすめポイントとして伝えたくなくて来ていた僕がいた。

3. 人懐っこさから限定コース

やたらと慣れ慣れしくしてくるキャストがいた。「あなたを見ると、ちょっかい出したくなるんだよねー」と出会って2回目の時から言われていた。彼女の名前は、ゆうな。

興味をもたれることはありがたいが、割と警戒しまくっていた。でも、これってプレイとなれば、何か活かせるコミュニケーションなんじゃないか？とも思った。

数ヶ月後、僕は彼女の限定コースを作ることになった。ここに至るまで、ゆうなどはいろいろあった。

予約が入っているが、親の体調が悪く、急遽帰ることになり、予約のキャンセルの連絡を入れたり、昔からのお客さんだったので、責任者に連絡を入れ、何かフォローできないか一緒に検討してもらったり。プレイ面では、なかなか予約が入らない状況

もあった。

彼女に対してでけでなく他のキャストにも思っていたが、他のキャストがいる中、なかなか予約が入らず待機室で過ごすほど、苦しいことはないと思ってきた。

僕は、このネガティブに漂う時間に、何かできることがないだろうか、ずっと考えていた。彼女の人懐っこさと写真のイメージ、予約をしてくる客をずっとにらめっこをしていた。

ここで抜けていることに気づいた。彼女がしたいことは何だろう。僕も興味を持ち始めた瞬間だった。

待機室で二人きりの時、僕は「えらい、近くにいてるし、パンツも見えそうで困るわ!」と言った。「そうですかー?もっと見せましょうかー?」「それは、客に見せろ!ってか、どんなプレイしたいとかってあるー?うまくいくかわかんないけど、一緒にコース作ってみて、責任者のルーブル・ガガに提案してみよっかー。特別扱いになるのは懸念するけど、まー今ある限定コースの表現を変えるだけって感じなら、イケると思うんだよね。」「うん!やってみます!」。

気づいたら僕は A4 の紙を出し、寝転がっている彼女と同じように僕も寝そべっていた。そして、「今のお客さんって、どんな感じの人が多いと思う?」「お客さんのメモはつくってる?俺が、この人すげーっておもったのは、かんなさん。一人ひとりお客さんのプレイ内容、日付、道具、コスチュームなんかを書いて、五十音順でファイリ

ングをしているよ。」「曜日や天気によって来る人もいるから、その辺も書いておくといいかもね」「一番、俺が知りたいこと。プレイで楽しいと思うことは、どんな時?」。

これらを、A4 の紙に書き出していき、本人が今からできること、今から店が提示できることと分けて考えてみた。

「快樂」と「奴隷」という言葉を使いコースのタイトルを作り上げた。欲求ある男が見ているモードに合わせて、多くの文面による、コース内容の提示は避け、コースで使える道具を表すことで客がイメージを持ちやすいようにした。

文言のチェックは、他の受付にも確認し、意見をもらってみた。同時に、責任者のところへ出向き、売り上げと彼女の積極的な思いを伝えた。

コースは完成。そこから、このコースで予約して来る客が徐々に増えた。僕は「3ヶ月は、焦らずこのコースをおいておいてみて、そこから次を考えていこう」と話した。その先は、僕は知らない。だけど、彼女がしたいことと客が受け取る彼女のプレイには差があった。

そこから、ごちゃごちゃしたコースを置かれ、立ち位置がわからないような印象に変わっていった。積み上げからの発展の見せ方ではなくなったコースだったので、彼女の中でどのように伸びて行っているのか気になった。ときに、相談連絡が来たことがあるが、彼女が動かなければ、次に進まないと思い僕からは動こうとは思わない。

それに、僕は店には、もういない。それ

でも彼女は、続けて所属している。

彼女が、あの時のように自分がしたいこと、どうしたらいいか探している状況に面白おかしく歩いて行く人に出会うか、自分でキャッチしながら、自ら店に言えるようになるといいなと陰ながら応援している。

4. 売り上げを届けただ飲み

締め作業。封筒にその日の売り上げ書類とお金を入れる。そのまま、事務所の金庫に入れておいていいも。

だけど、たまに「キヨ！今日、持って来てくれへん？」と責任者のガガから言われることがあった。

「なんで〜？」「いや〜まとめたいからさ〜」・・・本当は、必要じゃない。「え〜まあ〜けど。じゃ、締めが終わったら、BARに行くわ〜」ガチャ。

僕は、責任者にも敬語を使わないし、呼び捨てをするくらいのちょっと非常識人だと思ってしまう。一方で、それを許してくれる環境だったり、僕がSM業界人ではないから縛られていないのだと思う。

さてさて、そこに届けに行ってからだ。「キヨに飲み物出したって〜」この言葉が出た時は、朝の3時や4時くらいまでいることだってあった。短くても1時間くらいは滞在する。

「キヨ好きなもん言っているよ」、「んじゅ、カラジンで。瓶のままでもいいよ。」チーフに伝える。そこから、お代わりまで、自由にさせてもらえるただ飲み時間。こりゃ〜もう捕まったようなものだった。でも、

面白かったから、好きだった。

「今日は、どうだった？」「そやなあ〜。電話はならなかったな〜。今風俗業界としてもM性感が出て来てるから、SMにたどり着かない人、SM嗜好とっていたけど実は、M性感寄りの人が出て来てるかもしれない気がするな〜。だから、そこをわかった上でSMクラブをしっかりと見せて行くことは大事ちゃうかな〜。だって、SMが好きって人が行くことなかったら、めっちゃグロかったり、キチャナイ話や〜おもしろ！！だから、何か動き始めた方がいいと思うわ〜。例えば、俺は、SMがわかんない。だから、グッと来るポイントが、いまいちわからんね。ってことは、迷い込んで来にくいし、来ても、女の子も客と接しにくいとか生まれてる可能性はあるんとちゃう？」他にも「広報を頑張ることが全てだとは思わないな〜。コースの伝え方とか、イベントコースをタイトルで惹きつけるけど、内容は何かちょっと曖昧にしておくとかね。問い合わせある貴子のイベントを見ると分かりやすそうだけど、ちょっと質問したくなる。だから、問い合わせがある、そこから、受付がグッと推す。そして、伝えたことを女子にも伝える。これは、マッチングの話」。

たまに、ガガは、女子のメンタル的な心配をしていることもあった。僕は「いや〜それは、ガガが動いたらあかんやろ。女子同士でなんとかしてたり、待機室に来たりプレイ後に元気になったりしてるから、きやすいように、プレイが入るようにしたら、

楽しくていいやん。俺も事務所で過ごしやす
いから万々歳」

そんなことをだらだら話していた。タバ
コ6本くらい吸ってる日もあった。たまに、
「ショーやるからそれまで見ていきなよ」
と言われ、そのまま見て見ることもあった。

「店に私が入ったらいいかなー？」と言
われた時には「あかんな。ガガが来たらレ
ジ金合わへんからややっこいわ。」とか言い
ながら、少し距離を保つようにしていたこ
ともあった。

そんなことを言っていた理由はなんだっ
たんだろう・・・。

ガガの存在は内気な女子にとっては、緊
張感がマイナスに働くこともあるし、店の
変更点などを聞かせると気にする女子もい
たからだったかもしれない。僕は、彼女た
ちがプレイに専念できる何かを探していた
のだと思う。そして、そこには、責任者も
プレイヤーにも幕内が、いい方向に機能す
ることもあると思っていたのだろう。

5. アベルの悩み

アベルは、雅店長の次に来た店長。店長
と言われつつ、ガガと20年近く付き合い
があるから、店長として認められるまで、
平社員として置かれていた。見定め期間だ。

彼女のすごいところは、記憶力がハンパ
ないところ。事務作業も2回くらいで覚え、
客の名前とプレイ内容も覚えてしまう。他
にも、元プレイヤーただただあって、客
の要求も察知しやすい。

ただ、寝坊がハンパないし、子育て中と

いうこともあって、子どもの学校の予定と
の都合もつけたかったようで、シフトチェ
ンジが多かった。

でも、だからと言って、彼女のことを信
用できないと思うこともなかったし、頼れ
ないと思ったこともなかった。僕が持って
いない、仕事っぷりが大いにあった。キャ
ストのことも一生懸命に考えていることも
「清P最近気になるんだけど・・・」と
キャストのちょっとした言動から考えてい
た。すごく頼れると思った人だった。

他にも、彼女が来て、店がゆるくなった
と言ったらいいのか、女子がリラックスし
ている様子もあり、僕はこういう変化も面
白いと思い何か女子が店に来やすくなるん
じゃないかと思った。

客にとってもよかったように思う。彼女
がいるから客が問い合わせしやすいことも
起きていたと思った。僕は、彼女ができて
いることや存在の良さがあると思っていた。

しかし、ガガは認めなかった。ガガから、
「アベルを店長として鍛えてやってほし
い」と言われたことがあった。「え？いやー
俺は、アベルのことよく知らないけど、店
長だってしてしまえば、彼女がそこから考
えて動くんじゃない？しかも、失敗したっ
ていいじゃない。そこから、発展していく
ことって多いにあるんだから。俺は、女の
子たちに助けられて、SMを知ったり、店
のことどうしたらいいか考えるようになっ
たわけでさ。女の子たちも、それなりに柔
軟性があるから、大丈夫だって！肩書きや
身分で判断するのは、やめたら？」とまで

言ってしまったことがあった。

アベルは社員なのに立場は曖昧、どこまで自分が進めているのかわからない。進めでもガガが望むものでなければ、理由なく却下、取り合ってもらえていなかった。実力主義社会であることは、性風俗業界では当然なのかもしれないが、人柄が出やすい仕事であるから、なにを實力とするのかは要検討した方がいいと思ったし、なんとかならないものかと思っていた。

今でも、僕はアベルと連絡をしている。何かかわからないが、受付の連絡ネットワークに僕を抜かないでほしいということもあり、なんらか繋がりがあからだ。

アベル！いつのまにか、あなたは、俺をお父さんと呼ぶようになったね。たまに、天パの僕をチリ毛と呼ぶようにもなったね。何も嫌な気はしなかった。きっと、客も君のフランクさやちょっとした気配りや時にバカはしゃぎすることを魅力だと思っていると思う。一踏ん張りしよう、僕らの子どもであるキャストを大事に見届けていこう。もしかしたら、これまでもあったよう、見送る立場になることもあると思う。それでも、「このSMクラブに来てよかった」とどこかで思えるような、見送りの時期を迎えられるといいな、と思う。

6. 僕はサボっていたけど許されていた

僕は、通常の業務は大事だとわかっていただけ、そこまで大事だと思ってなかった。というか、一連の流れさえわかれば、あと

はSMクラブといった特殊な場だから、どうのこうのと言った話ではなかった。

いかに電話で予約につなげるか、ブッキングはないか、客の要望を聞き出しているか、そして、キャストに客の様子を伝えるか、その程度のことだった。

ただ、今も思い出すし、大事にしている仕事があった。SMクラブという非日常的な行いが行われる場だが、実は、リアルを生きているのはキャスト。僕は、キャストの生の声や過ごし方を知り、彼女たちに背中を押されるかのように新しい案を反映させていたのだろう。

それは、キャストがいなければ、店はない。店があるからキャストが集まる。キャストが今の客の欲望を見つけ出しにくるのだから。

短信で少し紹介したよう、今回でシーズン1「SMクラブの受付」を一旦終わりにし、次に進みます。

とか言いつつ、新しいシーズンでも、ついてくるはず。実は、最初に自分を売り込んだ場所が「SMクラブ」だったもので。働いている最中にガガに無理くり売り込んだのです。

ぜひ、読み物として手にするだけでなく！どうか・・・僕が何者なのか気づいていきたいので置いてくれる場、泳がせてくれる場のご提案やこんなところに来てみてよ！とお声かけしていただけるとありがたいです！

ツイキャスでラジオ始めました。その名も「カッテに喋ら Night!」。カッテに喋りたい人、カッテに聞いて過ごしたい人募集中。

Twitter アカウント@SystemKiyoo です。
今のところ不定期ながらに、水曜日の 22:00～行っています。清武システムズHP に録音のリンクを貼る予定です。

誰からも連絡きませんが、絶賛解禁中！

[『清武システムズ限定コース解禁!! ロートーク about 熟女コース～』](#)

人が見つかったので、あとは開始するだけになりました！！

綴り人/しすてむ・きよだけ

[清武システムズ](#)という看板を引っさげ、活動中。さーめんどくさいことも起きるけど、そっから面白く展開していこうじゃないか！という、通りすがりの旅人です。

「何か変化を求めているが、手立てがわからない。」そんな時にぜひ導入を！違う息吹ここにあり！

【連絡先】

info@kiyotakesystems.net